

はじめに

だが、民俗芸能と比べて、民間祭祀儀礼には「祭祀」という特徴があり、地域活性化資源として扱われる際にその「祭祀」の機能の保存が極めて重要となる。そもそも祭祀儀礼で最も重要な要素は儀礼の本体と儀礼に参加する人々の信仰心である。伝承者の信仰心である「祭祀」の機能は無形のものであり、儀礼本体の有形のものより保存が難題であろう。従来の現代社会において民間祭祀儀礼の研究で、伝承者が儀礼に対する信仰心の希薄化はよく取り上げられる問題だと見える。では、伝承者が信仰心の変化は地域活性化事業の推進の間に何か関係を持っているであろうか。伝承者の儀礼への信仰心の変化は民間祭祀儀礼が地域活性化資源の発展を促進すると同時に、変化させられているであろうか。

このように、現代社会における地域の祭祀儀礼の持続は地域活性化事業の発展とはどのような関係を持っているのか、また地現代化・都市化の発展により地域祭祀儀礼はどのような変化を生じたのか。さらに、地域の祭祀儀礼と深い関わりを持っている人々は儀礼の変化に対して、どのように捉えているのか。本文は以上の問題を念頭に置きながら分析を展開する。

— 147 —

## 1 本文の目的と調査地の背景

### (1) 本文の目的

本文では、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の中で、茨城県行方市麻生町天王崎八坂神社「馬出し祭り」を研究対象とし、疫病退散儀礼として「馬出し祭り」の特徴を分析する。また、現在「馬出し祭り」の変化を考察し、さらに伝承者たちの変化に対する捉え方から現代社会における疫病退散儀礼の現状及び地域活性化事業の発展が民間祭祀儀礼の伝承との関係を明らかにしたい。

分析手順としては、まず、現在の祭りの構造に注目しつつ、祭りの祭祀組織と伝承活動の現状を整理する。「馬出し祭り」は宵祭りと当日の祭りの2日間に行われ、麻生地区1年間最大の祭祀儀礼である。宵祭りで地域の住民に祭りの開催を知らせ、当日の祭りの参加を求める。また、宵祭りと祭りの当日には氏子は2日間で5色の吹き流しで飾られる馬を引いて氏子地区で巡行する。「馬出し祭り」を運営するのは保存会と当屋及び組合が主に担当される。保存会は馬に関わる事項を担当する。その一方、祭りの全体の段取りは当屋と当屋の組合が担当する。本文は筆者が2012年から2014年まで「馬出し祭り」に対する現地調査に基づき、祭りの構造を述べる。次に、「馬出し祭り」は疫病退散儀礼としての特徴を分析し、スサノオ神話との関連を考察する。「馬出し祭り」は最も注目されているのが馬の登場である。ここで馬の要素を取り上げ、疫病退散儀礼との関連を分析する。また、「馬出し祭り」の由来はスサノオがヤマタノオロチ退治する神話であると言われるが、それに関わる経緯がいまだに明らかにしていない。本節で筆者は氏子への聞き取り調査及び筆者の分析によりこの問題を解決したい。

次に、現地の伝承者への聞き取り調査により、現在の「馬出し祭り」の変化及び伝承者たちの祭祀儀礼の変化に対する考えを探る。昭和30年後に麻生地区の若世代の人は次々と大都市へ出嫁ぎに行き、地域の過疎化・高齢化の状況が深刻になってきた。その影響で、「馬出し祭り」に参加する青年団の人数が急に減っていき、祭りの規模も縮小されている。現在、伝承者たちは祭りの変化に対して自分なりの考え方を持っている。また祭りを見に来る写真愛好家側も祭りの変化に対する異なる捉え方を持っている。本文では祭祀儀礼の代表者である当屋と一般の氏子、さらに「外部の人」である祭りを見に来る写真愛好家への聞き取り調査を通して、祭りに関わる現地の人の祭りに対する捉えかたを明らかにする。

### (2) 調査地の概況

行方市は茨城県東南部の鹿行地域に位置し、霞ヶ浦に挟まれ懷に北浦を抱えている豊かな水に囲まれている。行方地元では霞ヶ浦の東側を「北浦」、西側を「霞ヶ浦」と呼ばれている。行方市は北浦と霞ヶ浦に挟まれたところである。現在、麻草の一本もない調査地の麻生町は「常陸風土記」によると、「麻生の里」と呼ばれ大きな麻が群生していた。その昔、「麻生の里」の南にある「香澄の里」は景行天皇が、印波の鳥見の丘（千葉県印旛沼周辺）からはるか東の方を眺められた時海（霞ヶ浦）には青波が漂い、陸には霞がたなびいていると言ったことから、霞の郷（香

澄の里」と呼ばれたと言われている。天王崎は、「香澄の里」の西から霞ヶ浦の中に突き出た大きな洲で、この洲の上に立って北を眺めると遠くに「新治の国」の筑波の山が見えたので、「新治の洲」と名づけられたと言われる（茨城県史編集委員会 1972）。

麻生町は、行方5か町村の中心にあり、町側の霞ヶ浦と東側の北浦の2つの湖に挟まれた台地に位置し、しかもその両方の湖岸を含む町域を持っている。昭和30（1955）年3月31日、旧麻生町と霞ヶ浦に面した西側地区、行方・小高両村および北浦に面した大和・太田両村の5か町村の合併によって成立した。その中核となった旧麻生町は、行方郡役所の所在地であり、警察署、区検査庁、簡易裁判所、税務署などのほか麻生中学校（旧制）もあり、近代100年を通じて、行方郡のみでなく県の南東部の、行政・経済・文教の中心地であった。

現在の麻生町は、総面積約56平方キロメートル、田、畑、山林がそれぞれほぼ等しく14～16平方キロメートルの広さを占める。田は、台地の東西の谷あい、溜地を利用して開かれた谷田と、西側の単調な湖岸線にそって干拓拡大された部分、及び西浦西岸に深く入り込む小湾を干拓して広がった部分などから成る。

### (3) 「馬出し」祭りの背景

麻生「馬出し祭り」は平成2（1990）年11月19日に、町指定無形民俗文化財になっている。麻生町の最大の祭りで、毎年7月の最終土曜日・日曜日に行われる。約300年の歴史があるこの祭りは、麻生藩の保護を受け、旧藩政当時は、毎年旧暦6月14日、15日の両日に藩主を中心として祭礼を盛大に執り行っていたが、廃藩後は、古宿、新田両集落が中心となり麻生「馬出し祭り」として、祭礼を行っている。

麻生で出版された『麻生の文化』2001年3号に、「馬出し祭り」の由来について1つの記載がある。それは、大蛇退治に倣い当麻生藩主新莊が近江より当麻生藩に国換えとなり、藩の総鎮守として藩主自ら供奉して領内二十か村の役員を集めて祭りをした。この祭事は戦国の武将として一朝有事の時も十分に役立てるように戦場にたって足輕の馬を引くためにも、また、いざ戦場にたって大軍の中にあって馬が動じないための調教で、祭りの時に、馬を脅かせたりするのである（羽生 2001）。この由来より、いままで麻生ではスサノオがヤマタノオロチ退治神話は「馬出し祭り」の由来であるとの言い伝えがあり、また氏子たちもスサノオ神話が「馬出し祭り」の由来を思われている。「馬出し祭り」で馬が「ヤマタノオロチ」の象徴と見なされ、また神輿が「スサノオ」の象徴と見なされている。祭りのクライマックスである馬と神輿の対決はスサノオがヤマタノオロチとの戦いと見なされ、結局スサノオがヤマタノオロチを退治し、地域の疫病を退散したと考えられる。

## 2 「馬出し祭り」の構造

「馬出し祭り」は行方市麻生町古宿と新田2つの地区の祭りであり、毎年7月最終土曜日と日

曜日の2日に渡って行われる。「馬出し祭り」保存会と当屋及び組合は祭りの全体の進行を担当する。保存会は牧場から馬を借りるや、馬の巡行など馬に関わる事項を担当する。当屋と組合は祭りの段取り、氏子がそれぞれの役割の分担を担当する。古宿と新田地区は、現在それぞれ祭りのために9つの組合がある。1つの組合はほぼ6軒から9軒の住民がいる。毎年の「馬出し祭り」は1つの組合を選び、そのうちに1軒の家が当屋を担当する。選ばれた当屋の家は祭りの準備から開催まで祭りの全般を担当し、当屋と同じの組合の家では当屋を協力して、祭りの世話人を担当する。

祭りの準備として、当番祭りの前週の日曜日に、当屋の家で注連縄おろしが行われる。同じ日に、天王崎八坂神社境内で御飯屋を建てる。「馬出し祭り」は7月最後の土曜日の宵祭りから始まる。

まず、「馬出し祭り」の宵祭りから見てみよう。

#### (1) 宵祭りの構造

宵祭りは7月最終の土曜日に行われる。朝6時に、新田地区の集会所で新田旗竿立てを行う。それから、「馬出し祭り」保存会の氏子は馬を引いて、新田地区と古宿地区で巡行する。「馬出し祭り」で使う馬は盛装5色の吹き流しをたれ、頭と尻にそれぞれの飾りをつけ、尻には鈴をつける。保存会の氏子は盛装した馬を引いて、チリンチリンと音をたてながら一軒一軒の家を回り、「馬出し祭り」開催の時間を伝え、祭りを宣伝し、祭りの奉納金をもらう。巡行する保存会の氏子は遠いところからも祭りの開催が分かるために、馬の飾り物と同じ色の服を着る（写真2）。馬が訪れた民家は保存会の氏子に奉納金を渡し、マッチに火をつけて燃やし、1年間の家族の無病息災を祈る。宵祭りの1ヶ月前から、氏子たちは「馬出し祭り」の宣伝ポスターを氏子地域各店に配り、店の目立つところに貼るようにしていた。7月の末の麻生は、1年で一番暑い時期である。巡行する氏子たちは汗をかきながら一軒一軒回る（写真3）。氏子地区で巡行する途中に、祭りの稚児のお宅へ稚児を八坂神社まで迎えに行く（写真4）。

保存会以外に、当屋と同じ組合の家は、天王崎八坂神社で宵祭りの準備をする。まず、八坂神社の社殿から神輿を出す。大人が使う神輿と子供が使う神輿を殿内から出し、きれいに掃除してから、正殿の前に置く。そして、八坂神社の鳥居の注連縄を新しく換え、神社境内の周りに祭りの提灯をつけておく。そのほか、神社のすぐそばに飯屋を建てる。宵祭りの最後に、神輿を翌日の朝まで飯屋に置く。飯屋を建てるのは事前に用意したテントを張り、鋼管6本でテントを支え、中に照明器具をとりつけ、「八坂神社」と書かれた木坂をテントの真ん中に吊るす（写真5）。このように、八坂神社宵祭りの準備が終る。

宵祭りの午前中に、新田と古宿地区の子供会は、婦人会と一緒ににわか馬を引いて氏子地区へ巡行する。地区の子供たちも馬出し祭りに参加させるため、子供たちが使うにわか馬が用意される。にわか馬は木と猪の毛で馬の形をまねして作られ、大きさが馬の2分の1だけである。にわか馬の下に4輪がつけられ、子供たちはにわか馬につけた縄を引き、太鼓を叩きながら、氏子地

域で巡行し、「馬出し祭り」を宣伝する（写真6）。にわか馬は祭りで使われる馬と同じく5色の吹流しで飾られる。

午後2時頃に、宵祭りが始まる。まず、天王崎八坂神社の宮司により宵祭りの参加者に神事を行う。神事は八坂神社の神殿で行い、参加者が祭りの氏子代表、麻生警察署代表、当屋代表、組合代表、稚児などである。神事は約15分間行われる。神事後、宮司は祭神の「真体」<sup>(1)</sup>を本殿から出して誰も見えないように袖に隠しながら神輿の中に置く（写真7）。このように神様の魂が入ってから、神輿は祭神と一体になると考えられる。

神事が終ると、神輿と馬の対決が行われる。宵祭りは本番祭りの時と比べ、馬と神輿を対決する時間が短く、氏子地区での巡行の時間が長い。対決の前に氏子は馬に特別の飾りをする。神輿と対決する馬の飾りは巡行する際に馬の飾りと違って、白色の布で馬の全身が包まれる（写真9）。赤色の布は馬を刺激させるため、神輿と対決する時、赤色を避けて白色の布で馬を飾ることにするという<sup>(2)</sup>。また、対決では大変激しく動くので、熱中症に用心しなければならない。そのため、対決に参加する氏子たちは塩を口に少し入れて、体の塩分の流失をしないように保障する。そのほか、氏子たちは御幣を一枚耳の後ろに挟み、馬にも1枚ずつ耳に挟む。対決を無事に行うことを祈る意味だそうである。地元の人はこの御幣を「ヒ」<sup>(3)</sup>と呼ぶ（写真10）。以上の準備が出来上がると、神輿と馬の対決が始まる。

神輿は2台あり、子供たちが使う神輿と大人たちが使う神輿に分けられている。最初に子供たちが神輿を担いで馬と対決する。子供たちは神輿を担ぎ、馬を神社の本殿前から鳥居まで追い出し、鳥居をくぐりまた神社の本殿まで戻る。大人が神輿を担ぎ馬と対決する様子を真似して子供たちは、「わいしょ、わいしょ」の掛け声を唱えながら、笑いながら神輿を担いで馬を神社の本殿前から鳥居まで何回も追い出す（写真12）。子供たちの神輿は大人たちが使う神輿よりずいぶん小さいが、それでも子供にとっては大変な重さである。祭りに参加する子供は小学生の三年生の女子と男子である。暑い昼間に、子供たちは両親からもらった氷棒を食べながら、にわか馬を楽しむ。子供たちが恐らく祭りの意味を分かっていないが、祭りが子供の参加により、にぎやかで楽しめる祭りになったのではないだろうか。

子供神輿の次に、大人たちの神輿と馬の対決が始まる。氏子たちは先に赤い紐で神輿を縛り、紐を手握って神輿を肩で担ぐ。1人の氏子が先頭に立ち、玉櫛を握って神輿の前進を指図する。ほかの氏子たちは神輿を担ぎ、馬を追いかける。馬が驚いて鳥居のほうに逃げる。馬が驚き過ぎて、抑えられない場合があるため、神輿と馬が対決する参道は縄で囲まれ、祭りが縄で囲まれた枠の中で行われる。祭りを見に来る写真愛好家たちは参道の外に立って祭りを見る。馬は何回も追われると興奮状態になって振りかえり、神輿を担ぐ氏子に向かって走る場合もある。そのため、馬と対決する時に、神輿を担ぐ氏子たちは常に馬の状態を見ながら走りのスピードをコントロールする。馬のスピードに合わせて神輿を担ぎ、安全を確認する上で馬と対決することは、祭りを無事に行うために重要である。

宵祭りで馬と神輿の対決は十数回に行われる。前に述べたように、神輿と馬の対決は氏子に

とっても馬にとっても非常に体力を必要とするため、熱中症を防ぐために途中何回も休憩を入れて行われる。馬と神輿は宵祭りのクライマックスであり、多くの写真愛好家は馬と神輿の対決が最もよく見えるために、八坂神社の鳥居でカメラを構え、宵祭りの素晴らしい瞬間を写真におさめる。

対決が終ってしばらく休憩が入り浜降りを行う。

2012年度の「馬出し祭り」の宵祭りの神輿は1千万円を掛けて新しく直したばかりのため、氏子たちが相談をして2012年度から3年間は浜降りを行わず、代わりに神輿を霞ヶ浦の岸辺に置くことが決められた。そのため、2012年度の浜降りは氏子たちが神輿を八坂神社の境内から霞ヶ浦の岸辺に担いだが、5分間ほど岸辺に置き、また八坂神社に戻した（写真11）。浜降りには子供会も参加するので、子供会は子供たちが使う神輿も八坂神社から霞ヶ浦の岸辺に担ぎ、しばらく置いてからまた八坂神社に戻した。

浜降りが終ってから、氏子は神輿を担ぎ、氏子地区古宿と新田への巡行が始まる。巡行の順路は天王崎八坂神社から出て、レストラン大湖前に10分の休憩をし、また中華料理店牡丹江飯店前に10分の休憩をしてから、三光院に着き30分の休憩をしてから、稚児宅に着き20分の休憩をして、霞ヶ浦湖畔を通して、当屋のお宅で食事をしてから、最後に天王崎八坂神社の仮屋まで戻す。神輿を仮屋に戻してから、宮司により氏子の全員に神事をする。神事が終わったら、宵祭りが終了になる。

宵祭りは終わったが、氏子たちにとっては祭りを楽しむ時間は始まったばかりである。婦人会の奥さんたちは祭りを1日頑張った氏子たちのために直会を準備し、みんなビールを飲みながら宵祭りを楽しむ。

昼の宵祭りは終わったが、巡行するチームはまだ麻生地区を回り続けている。宵祭りは稚児が巡行する。氏子の中から5歳の男の子を選び、馬に乗せて氏子地区で巡行する役目がある。筆者が調査した2012年度の「馬出し祭り」は氏子地区で5歳の男の子3人の中から1人を選び、祭りのための服装を着て馬に乗ると聞いた。氏子たちの助けもあり、酷暑にもかかわらずおとなしく馬に乗って、ほかの氏子たちと一緒に2時間も氏子町会を巡行していた（写真14）。

## (2)「馬出し祭り」の構造

宵祭りの翌日に本番の祭りを行う。午前中、宵祭りと同じく保存会は馬を引いて新田地地区と古宿地区で巡行する。午後2時頃に、八坂神社の宮司が馬出し祭りの参加者に神事を行う。神事の最初に、宮司と参加者の代表者が八坂神社の神殿で修祓を行う。修祓の後、仮屋に移り神事を行う（写真15、16）。祭りの参加者は宮司から玉串、赤飯、今年の新穀と、白い紙で作られる「ヒ」をもらって、祭りを無事に終わることを祈る（写真17）。神事が終わると本番の「馬出し祭り」が始まる。

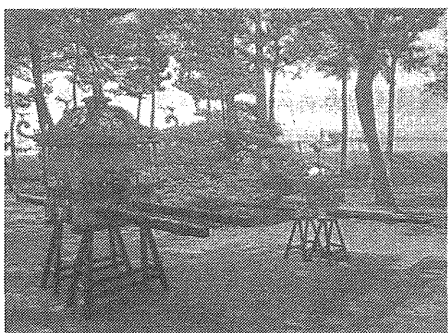
最初に、氏子は神社の神殿から鳥居まで神輿を担ぎ、鳥居を3回潜ってから、神社に戻り、それから馬と神輿との対決が始まる。第一回目の対決は、馬がまだ完全に驚いてはないので、激し

くなかった。しかし、だんだん後ろに進むと、馬がすこしずつ興奮してくるので、神輿と反対の方向に逃げるのではなく、神輿の正面を足で蹴る。馬を引導するひとは力を尽くして馬をお神輿の反対の方向に引いて行こうとするが、馬は神輿を蹴り続けている。このような時は、神輿を少し後ろに下げるしかない。猛暑で倒れてしまわないように、十分間休憩をとる。参加者は塩をそのまま口に入れて休憩する。休憩後、また馬を立たせて、神輿を担ぎながら、馬を鳥居のほうに追いかける。30分ぐらいして、馬も神輿を担ぐひとも動けなくなったときに、対決は終わる。

馬と神輿の対決がってから、浜降りが行われる。宵祭りと同じく、氏子は神輿を霞ヶ浦の浜に置き、新木だけを担いで霞ヶ浦に入る（写真18）。7月の暑い天気です1日の祭りをを行うことに疲れた氏子は、湖に祓われるとともに、熱い体を癒し、祭りの最後を楽しむ。浜降りがほぼ30分で終わると、神木を担いで霞ヶ浦で思う存分に祓われた氏子は、神輿を担ぎ八坂神社の神殿前に戻す。祭事委員長より祭りの2日で祭りのことを頑張った氏子の皆さんに簡単な挨拶をしてから、「馬出し祭り」が三本詰めで終る。

（表1）2014年7月「馬出し祭り」タイムスケジュール

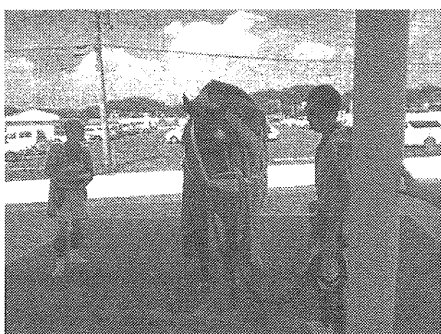
時間	参加者	場所	内容
28日6:00	保存会、氏子	新田集会所	新田旗竿立て
28日7:00	保存会	新田、古宿	馬を引いて氏子地域へ巡行する
28日14:03	氏子全員	八坂神社	八坂神社の正殿で宮司により祓いを受ける
28日14:55	氏子全員	八坂神社	神輿と馬の対決
28日15:50	氏子全員	霞ヶ浦の浜	神輿を霞ヶ浦の浜へ担ぐ
28日16:24	氏子全員	八坂神社	神輿を八坂神社へ戻す
28日15:40	氏子全員	新田、古宿	神輿を担ぎ、新田・古宿で巡行する
28日16:00	氏子全員	レストラン大湖前	休憩10分
28日16:30	氏子全員	牡丹江飯店前	休憩10分
28日17:00	氏子全員	三光院	休憩30分
28日17:40	氏子全員	稚児宅	休憩20分
28日18:04	氏子全員	霞ヶ浦湖畔	休憩5分
28日18:32	氏子全員	当屋宅	休憩10分
28日19:03	氏子全員	八坂神社	神輿を担ぎ巡行することを終る
28日19:06	氏子全員	仮屋前	宮司により氏子全員に神事をする
28日19:24	氏子全員	仮屋前	神輿を仮屋に置き、宵祭りが終了する
29日8:30	保存会	古宿、新田	馬を引いて氏子地区へ巡行する
29日14:06	氏子全員	仮屋前	仮屋で宮司により神事を受ける
29日14:45	子供会	八坂神社	子供神輿を境内で担ぐ
29日15:52	氏子、保存会	八坂神社	神輿と馬の対決
29日15:26	氏子全員	八坂神社	神輿と馬の対決が終了
29日15:40	氏子全員	霞ヶ浦畔	神輿を霞ヶ浦の浜に置く
29日15:43	氏子	霞ヶ浦	神木を担ぎ霞ヶ浦に入る
29日16:17	氏子全員	八坂神社	神輿を担ぎ、八坂神社に戻す
29日16:30	氏子全員	八坂神社	神事が終了する
30日6:04	当屋、組合	仮屋	新田仮屋解体
30日6:10	氏子、保存会	古宿集会所	古宿注連縄解体



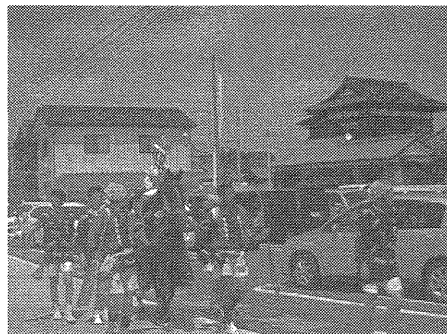
(写真 1) 宵祭りの時の神輿  
(2012 年 7 月 28 日 筆者撮影)



(写真 2) 馬を引いて巡行する  
(2012 年 7 月 28 日 筆者撮影)



(写真 3) 巡行中の馬  
(2014 年 7 月 筆者撮影)



(写真 4) 稚児迎え  
(2014 年 7 月 筆者撮影)



(写真 5) 飯屋  
(2012 年 7 月 筆者撮影)

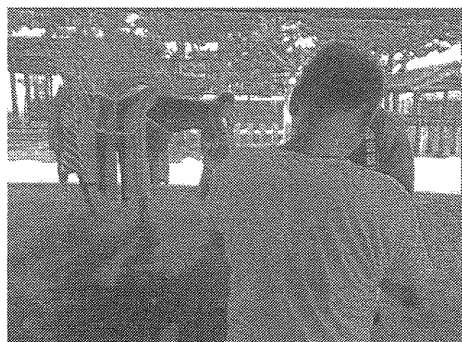


(写真 6) 子供ためのわか馬  
(2012 年 7 月 筆者撮影)





(写真 7) 祭神の「正体」を神輿に入れる  
(2012 年 7 月 筆者撮影)



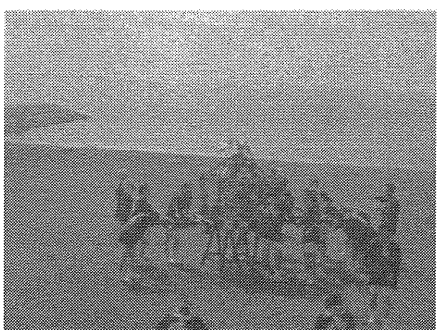
(写真 8) 氏子がマッチに火をつける  
(2012 年 7 月 筆者撮影)



(写真 9) 神輿を対決する馬の様子  
(2013 年 7 月 筆者撮影)



(写真 10) 馬の耳に「ヒ」を挟む  
(2013 年 7 月 筆者撮影)



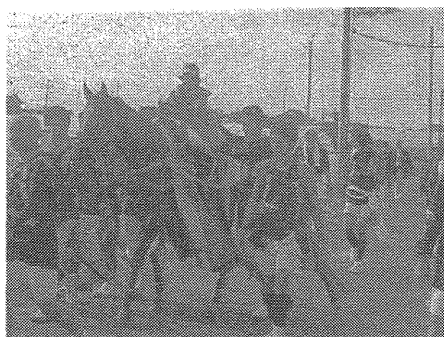
(写真 11) 神輿を岸辺に置く  
(2012 年 7 月 筆者撮影)



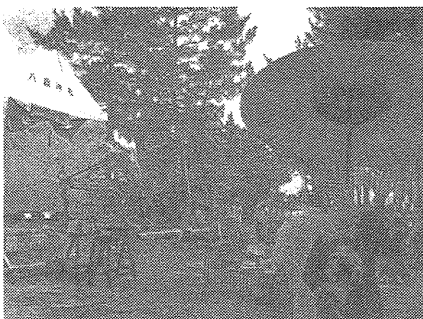
(写真 12) 宵祭りで子供会が神輿を担ぐ  
(2013 年 7 月 筆者撮影)



(写真 13) 神輿と馬の対決  
(2012 年 7 月 28 日 筆者撮影)



(写真 14) 馬に乗せて巡行中の稚児  
(2012 年 7 月 28 日 筆者撮影)



(写真 15) 飯屋の前で神事を行う  
(2012 年 7 月 筆者撮影)



(写真 16) 飯屋の前の神事  
(2014 年 7 月 筆者撮影)



(写真 17) 宮司から玉串をもらう  
(2014 年 7 月 筆者撮影)



(写真 18) 浜降り  
(2014 年 7 月 筆者撮影)

### 3「馬出し祭り」に対する分析

本文の研究対象である茨城県行方市麻生町天王崎の「馬出し祭り」の中で「ヤマタノオロチ」を象徴する物は馬である。一見「蛇」とは何の関連もない「馬」が、なぜスサノオ神話に由来する疫病退散祭祀の中で「ヤマタノオロチ」の象徴として使うのか。次の文を見てみよう。

#### (1)「馬出し祭り」はなぜ馬なのか

「馬出し祭り」はスサノオがヤマタノオロチを退治する神話に由縁する祭りである。八岐の大蛇に見立てた飾り馬と祭神スサノオを奉じた神輿がもみ合う神事は祭りの圧巻である。ここで注意すべきところは、ヤマタノオロチを象徴するのが馬だということである。神話の中の蛇がなぜ現実の祭りの中で馬になってしまうのだろうか。

馬が重要な要素として祭りの中に出てくる原因については、麻生で出版された『麻生の文化』2001年3号に、馬出し祭りの由来について1つの記載がある。それは、大蛇退治に倣い、当麻生藩主新莊が近江より当麻生藩に国換えとなり、藩の総鎮守として藩主自ら供奉して領内二十か村の役員を集めて祭りをした。この祭事は戦国の武将として一朝有事の時も十分に役に立てるように、戦場にたって足輕の馬を引くため、また、いざ戦場にたって大軍の中にあって馬が動じないための調教として、祭りの時に、馬を脅かせたりするのである（羽生 2001）。

また、行方地方では、かつて、各地の神社に馬場があり、流鏑馬や競馬が行われた。現在の「馬出し祭り」の馬と神輿の対決は、昔競馬の形式からだとの説もある<sup>(4)</sup>。そのほか、地元の人々は現地がかつて馬の産地として有名になっていたからだとの声が高い。以上が麻生の郷土史家と一般住民が祭りで馬の要素に対する分析であるが、一方それ以外の捉え方はあるだろう。

桜井龍彦は馬と疫病送りとの関連についての研究の中で、馬が疫神の乗り物として民俗儀礼の中でよく出てくると論じた（桜井 2000）。桜井は神奈川県横浜市中区本牧神社の「お馬流し」と愛知県一宮市の「芝馬祭」の事例を使って、馬が祖霊信仰と御霊信仰の2つの信仰体系の中に登場するもので疫病退散儀礼と深い関連を持って、農耕を中心とした年中儀礼の意義が持っているとの結論をした。また中世からの歴史文献の中で疫病神が馬に乗って夜行するなど馬と疫病退散儀礼の関連が記録されている、そのほか朝鮮半島や中国の江南地域でも疫神送りの儀礼で馬の要素が出てきた（桜井 2000）。桜井の論説から見て、「馬出し祭り」では麻生八坂神社の氏神牛頭天王が疫病神として馬を乗って地域の疫病を退散する祭りだったが、近代になって氏神牛頭天王がスサノオに替えられるによって、祭りがスサノオヤマタノオロチ退治神話と関連がつけられるので、馬が「ヤマタノオロチ」に見立てる物と考えられるようになったとの過程を経ていた。現在麻生八坂神社の社殿の壁にまだ牛頭天王の神像が張ってあることから、近世まで麻生八坂神社の祭神が牛頭天王であったことが分かる。

また、奥野義雄が古代の都市と村の祭りごとの研究で、古代では祭具としての土馬が水霊（神）信仰に関連があり、行疫神・祟り神の解除にも関わりがあると述べた（奥野 2000：25）。奥野により、水霊信仰つまり雨乞・請雨祈願と土馬とを結び付ける説は従来からあったが、古代の史

料から見ると馬が行疫神を祭るべきものである（奥野 2000：25）。上の先行研究から見て、「馬出し祭り」の中の馬は疫病退散儀礼でよく出てくる要素で、「ヤマタノオロチ」とは直接的な結びつきはないと言える。明治以後、八坂神社の祭神が牛頭天王からスサノオに換わることによって、馬がヤマタノオロチを象徴する物になるようになった。そのため、「馬出し祭り」の中の馬は、ヤマタノオロチに見なされるのが明治以後だと推測できる。

## (2) スサノオ神話との関わり

「馬出し祭り」に関する収集してきた資料を見てみると、「馬出し祭り」の由来について「スサノオがヤマタノオロチを退治する神話に由来する祭りだ」と書いている。また、氏子たちも祭りの由来はスサノオ神話だということに口を揃えていう。「馬出し祭り」の由来は祭りの当初から、スサノオ神話だということが定論になっているが、あることが筆者の注意を引き寄せた。氏子の案内をもらい、天王崎八坂神社の社殿まで行った。そこの壁に牛頭天王の神図が掛けられている（写真 19）<sup>(5)</sup>。現在八坂神社の祭神がスサノオノミコトであるが、神仏判然令が頒布される前は神社の祭神が牛頭天王である。天王崎八坂神社は同じく、近代に入ってははじめ祭神が牛頭天王からスサノオになったと考える。

では、天王崎八坂神社は祭神の変更が祭りの由来に何か関わりがあるだろう。言い換えれば、「馬出し祭り」の由来は祭りが行われる最初からスサノオ神話と関連があるのか。この疑問は天王崎八坂神社が近代に入り、祭神が変更したことによって、さらに疑われるようになった。「馬出し祭り」は近世までにその祭神が牛頭天王であるが、近世になってからスサノオに変えられたとしたら、祭りの由来がいったいつからスサノオ神話と結び付くようになったのであるか。一見矛盾の説であるが、現地の伝承者たちはこれについてどう思っているのか。次の文から見てみよう。

「（筆者が「馬出し祭り」の由来が「スサノオがヤマタノオロチ退治する神話だと言われることを聞いて、それについて答える）

〔事例 1〕2013 年 8 月 天王崎八坂神社境内で 氏子 FN 氏 男性

「俺がこの祭りに参加する前にすでに「馬出し」が「スサノオがヤマタノオロチ退治神話に由来すると聞いたが、誰そしてどこから聞いたのか、もう分からない。まあ、ここの神社（天王崎八坂神社）の祭神がスサノオだ。これとは何か関係があるかも。でも、詳しくは分からない」

〔事例 2〕2014 年 7 月 天王崎八坂神社境内で 氏子 SK 氏 男性

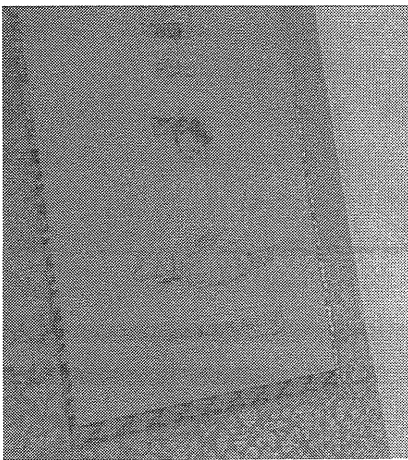
「神話の由来は元々あった。御神輿がスサノオノミコトで、馬がヤマタノオロチだ。スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する神話から、このお祭があった。この神社の祭神はスサノオノミコトだ。これとは何かの関連があるかなと思います。」

「事例 1」と「事例 2」から見ると、祭りの伝承者たちにとって祭りとスサノオ神話との関わり

をあまり意識していないことが分かった。どこから伝えられた話かはすでに考察できないが、ただ単純にこのような話を聞いたことがあると氏子 FN 氏が答えているように、伝承者たちが祭りの由来についてほとんど先祖から聞いた話である。また、祭りを見に来る写真愛好家に祭りの意味を説明する時も、地区の氏子は神輿と馬をそれぞれ象徴する意味を写真愛好家に伝える。

このように、地域の伝承者は祭りの神話の由来を一般的に詳しく理解していないことが分かる。伝承者たちにとっては、先祖から伝えられてきた地域の祭りを伝承し、また地域の氏子と祭りを楽しむことが最も大事なことである。祭りの歴史と神話由来は、むしろ地域以外に人に祭りのことを説明する際だけの話であり、地域内部の氏子にとっては、特別な意義を持っていない。

だが、現在社殿の壁に掛けられている牛頭天王の神図から見ると、近代に入って、天王崎八坂神社の祭神が牛頭天王からスサノオに変更されてはじめて、祭りの由来がスサノオ神話と結び付くようになった可能性が非常に高いと考えている。つまり、「馬出し祭り」は近代に入ってから、その由来がスサノオ神話になった。また、祭りにおける神輿と馬の象徴も、近代に入りスサノオとヤマタノオロチとなった。近代の前に、天王崎八坂神社は祭神が牛頭天王であり、「馬出し祭り」の中の馬では疫病神が乗るものとして、疫病退散儀礼でよく出てくる要素と見なされていたではないかと考える。



(写真 19) 天王崎八坂神社の社殿  
に掛けられている牛頭天王の神図  
(2013 年 7 月 筆者撮影)

#### 4 現在の「馬出し祭り」の変化

300 年あまりの歴史を持つ「馬出し祭り」は現代社会において多くの変化があった。地域の伝承者はこれらの変化を経験しながら、祭りを続けて行っている。筆者は 2012 年、2013 年と 2014 年の「馬出し祭り」に参加し、当地の氏子に昭和 30 年から現在まで「馬出し祭り」各方面の変

化について聞き取り調査をした。以下氏子に聞き取り調査内容を基づいて「馬出し祭り」の変化を述べる。

#### (1) 馬の数の変化

「馬出し祭り」は、名前のとおり馬が祭りの中で重要な要素を占めている。2012年の「馬出し祭り」に参加する馬は3匹であったが、1990年代の時には祭りに参加する馬が7匹もあったそうである。祭りに参加する馬が数の減少はいくつ什么原因が考えられる。まず、地場産業の変更に関係がある。氏子により、昭和30年代前、麻生では馬の産地であり、各家に農作業のために馬を飼っていた。昭和30年代以後、農作業をする人が少なくなりに伴い、馬を飼う実用性もなくなってきた。地場産業の変更に影響により、馬を飼う人が次第になくなった。馬の消失は「馬出し祭り」に大きな影響を与えた。昭和30年代後のしばらく、「馬出し祭り」で使える馬がないことは、地域の氏子に大変困らせた。そのときに、娘が3人いる家は、娘も祭りに参加できるように、にわか馬を作っていたとの話を聞いた。にわか馬の出現は、男子以外の女子でも祭りに参加できるようになったと同時に、祭りに馬がない問題もしばらく解決した。このように、昭和30年代以後の何年間で、「馬出し祭り」では本当の馬がなくなり、にわか馬を使って祭りを行っていた。だが、にわか馬は到底本当の馬ではないため、にわか馬を使ったことで次第に祭りの時間が大幅に短くなった。

それだけでなく、氏子が祭りに参加する積極性も大きく弱くなり、祭りが元々の活気が全くなかった。「馬出し祭り」の活気を回帰するため、また元々の祭りの様子に戻すために、行方市役所が当地の麻生馬場と連絡を取って、祭りの2日に馬場の馬を借りて祭りを行うことにした。このように、「馬出し祭り」はまた馬と楽しめる祭りに回帰するようになった。だが、80年代に入り、麻生の馬場が通年の赤字で倒産されたため、氏子たちは当地の牧場と連絡して、それから祭りの2日間に牧場の馬を借りるようになった。だが、牧場の馬の数が馬場ほど少ないので、1日馬を借りる賃金も馬場よりずいぶん高い。

昭和30年前には氏子が自家で飼う馬を祭りで使うため、馬の数が多いために10匹があり、少なくとも6匹の馬が使っていたそうである。だが、麻生の牧場から馬を借りて祭りを行うようになって以来、1匹の馬が40万円もかかるため、昭和30年前と同じぐらいの数の馬を祭りに使うことが不可能になった。従って、80年代までに4匹の馬を麻生馬場から借りて祭りで使うことにした。また、80年代に入り、麻生の牧場から祭りの馬を借りるようになってから現在まで、「馬出し祭り」で使える馬が3匹になった。

そして、氏子の人数の減少も馬の数に影響を与えたと考える。新田と古宿地区氏子は人数の減少により、八坂神社の奉納金も毎年次第に少なくなってきた。「馬出し祭り」に使用できる金額が少なくなり、馬の数も減ってきた。祭りで使う馬は麻生の馬場で借りたもので、1匹の馬が1日の賃金が60万円で、氏子たちにとって重い負担になっている。このような状況で、2000年になると、祭りに参加する馬は6頭から4頭になり、さらに2006年になると3頭になった。

祭りに参加する馬の数の減少について、何人かの氏子に聞き取り調査を行った。

[事例 3]2013 年 8 月 麻生八坂神社で 氏子 NS 氏 男性

「この祭りが「馬出し祭り」だから、馬が一番重要だ。昔、みんな馬を飼ってたから、馬出しの時に、みんな自分の家の馬を引いて、祭りに参加してたよ。今、農業をする人が、いなくなったから、馬もなくなった。麻生の馬は農作業で使ってたの。だけど、今、馬が、そのむこうの馬場でお金をかかって借りてきたから、2 匹とか 3 匹だけ。昔のように、できなくなっちゃった。今、お祭で、氏子みんな 1 人 1 万 5 千円を祓うよ。お祭のために。だけど、そのお金がほとんど馬を借りる時に使っちゃった。うん、それはとても、しかたがないんだ。」

[事例 4]2013 年 8 月 麻生八坂神社で 氏子 SK 氏 男性

「この馬は全部馬場から借りたの。1 匹 60 万だぞ。高いよ。今の麻生、人が昔と比べ、少ないから、奉納金も前より少なくなってきた。祭りをするのが相当のお金がかかる。馬を借りるのが一番お金かかる。今お金がないから、馬を 2 匹だけ借りれるかなあ。6 年前ぐらいはこんなに高くなかった。あの時に、まだ 2 つ馬場があるんだ。その内の 1 つが、相当大きな馬場だ。その時に、1 匹の馬が 1 日 30 万だった。今馬場が 1 つ小さいのだけになっちゃうから、賃金も高くなった。だから、みんな相談して、馬を 3 匹になっちゃった。これから、2 匹になるかもしれない。まあ、しょうがないなあ」

との話があった。氏子 NS 氏と SK 氏からの話を聞いて、祭りに参加する馬の数の減少は麻生が地場産業の構造の変更とは直接な関係があり、また氏子の人数の減少も 1 つの原因であるということが分かった。昭和 30 年前に、各家で農作業をするために馬を飼ったが、その後馬を飼う実用性がなくなったので、馬がいつのまにか麻生で消えてしまった。また、80 年代前の麻生には日本全国でも有名な馬の産地の 1 つであった。しかし、80 年代中期ごろ、日本のバブル経済の影響が麻生の馬場の経営にも影響を与えて、赤字になった馬場は倒産して麻生の地場産業に波紋を投げた。麻生の馬場は相次いで倒産したことと共に、馬場から馬を借りる賃金も相対的に上がった。結局、地場産業とは直接に繋がる祭祀活動は地域の産業構造の変更によって一緒に変化することに至った。神輿と対決する馬は少なくなったため、祭りで一番人気だった馬と神輿を対決する場面の規模が縮小された。地場産業の衰退は、祭りの規模まで影響を与えたことが見える。

## (2) 浜降りの変化

「馬出し祭り」最後の一環として浜降りは神輿と氏子が海に入って祓いを受け、1 年間に疫病を近づかないように祈願する。祭りのクライマックスである神輿と馬の対決が終って、神輿と氏子の浜降りを行う。氏子たちは祭りの興奮と疲れを持ちながら、神輿とともに霞ヶ浦に入って祓いで身体と精神の清浄を求める。しかし、2012 年から「馬出し祭り」は浜降りを行わなかった。

祭りに参加する氏子への通知の紙にも、太字で「お神輿を大切に扱いましょう。絶対水につけないこと」と書いている。浜降りの挙行について、氏子にはそれぞれ違う意見を持っている。以下では、氏子たちが浜降りの変化についての話を見てみよう。

[事例 5] 2012 年 7 月 麻生八坂神社で 氏子 HN 氏 男性

HN 氏との話から、「馬出し祭り」の仮屋は昭和 60 年前には、現在の八坂神社の向こうではなかった。昭和 60（1985）年まで仮屋は神社から 1 キロぐらい離れ、古宿の集会所のところであった。昭和 60（1985）年に、八坂神社隣の道路に堤防ができ、堤防から湖まで浜ができた。古宿の集会所が狭くて坂道であるため、仮屋も現在のほど大きくなかった。昭和 62（1987）年に、古宿の集会所で大きな事故が発生した。宵祭りで神輿を天王崎八坂神社から仮屋まで担いだ、氏子たちは神輿を担ぎ古宿にあった仮屋まで上がったときに、神輿を担いでいる 1 人が坂道に転んで、他の 2 人の氏子も一緒に転んで、足を神輿に転がされた。救急者を呼んで、すばやくにけがした氏子を病院まで運んだ。結局、3 人の氏子が骨折することになった。昭和 62（1987）年の事故で、氏子全員は相談しあい、仮屋をより広いところに移すということを決めた。ちょうど天王崎八坂神社隣の堤防ができたため、新しい仮屋の場所を現在の神社のとなりの空地に変更するようになった。

新しい仮屋に移してから、仮屋のとなりに霞ヶ浦の浜があるので、昭和 62（1987）年になってはじめて、「馬出し祭り」が浜降りをやるようになった。だが、HN 氏は「馬出し祭り」で浜降りをすることに対して、最初から現在でも反対な態度である。HN 氏は、神輿は神が中に座っているもので、神輿を湖に入れることが、神を湖に入れることであり、神に尊敬していない態度だとの考えを持っている。そのため、2012 年に神輿を 1 千万円かけて新しく飾り直した際に、HN 氏はこれを切っ掛けとして、またみんなに説得する理由として、それから神輿に浜降りをしないように主張した。祭りの前に氏子たちの打ち合わせで、やはり浜降りをやり続けてほしいと主張する氏子は何人かいったが、結局新しく飾り直したばかりの神輿を湖に入れたら、すぐさびるからもったいないという理由で、2012 年からの 3 年間はとりあえず神輿で浜降りをやらないことを氏子のみんなで決めた。HN 氏は浜降りをやめることに対して、「本来の祭りに回帰してよかった」と語ったが、HN 氏の以外に、浜降りをやりたい氏子らはまた違う意見を持っている。

[事例 6] 2012 年 7 月 天王崎八坂神社で 氏子 NG 氏

「今年の春に神輿を新しくしたの。1000 万円もかかった。大体神輿を 10 年ごとに新しくする。八坂神社の神輿は『馬出し』だけじゃない、獅子舞の時も出す。お神輿を大体 10 年を使ったら、奉納金を使って新しくする。ほら、ピカピカでしょう（筆者に神輿の方向を指す）。でも、今奉納金が少なくなったので、みんな相談してこれから 15 年か 18 年ごとに新しくしたい。ほら、今年新しくしたばかりでしょう。だから、浜降りやりたくないなあ。神輿が、もったいないから。もしこれから 15 年に一回新しくするなら、今年から 3 年以内に浜降りしないほうがいい」



[事例 7] 2012 年 7 月 麻生八坂神社で 氏子 SK 氏 男性 1957 年生まれ

筆者：今年には浜降りしないということを聞いたんですが、そうですか。

SK 氏：そうです。今年浜降りやらない。新しくしたばかりの。もったいないさあ。霞ヶ浦の浜に降りて、それでしばらく置くだけでいいの。

筆者：それは祭りの完備性が失われる恐れがあるじゃないですか。

SK 氏：まあ、大体今祭りはそうでしょう。実際のお金の問題に関わるから、仕方がないでしょう（筆者に苦笑しながら言う）。神輿を新しくするのが結構お金かかる。なんか 1000 万円もかかるぞ。なので、神輿を大事に扱わないと。

筆者：ちょっと変な質問かもしれないですが、もし経済的な要素を別において、みんなは気持ちだけ考えると、浜降りをやりたいですか。

SK 氏：うん、それは、やりたいでしょう。浜降り楽しいし。祭り 2 日もやったし、特に今日神輿を担いで馬と対決やるのが、あれ結構疲れるよ。みんなびしょびしょだ。毎年一番暑い時に「馬出し」やるの。だから最後に、霞ヶ浦に入って、ちょうどいい。はは

[事例 8] 2012 年 7 月 NM 氏のご自宅で NM 氏 男性 75 歳程度

筆者：今年の浜降りをやらないと聞いたのですが、そうですか。

NM 氏：そうだよ。この前の 3 月に大金をかけて神輿を飾り直したん、浜降り今年やらない。今年から 3 年以内にやらないそうです。

筆者：そうですか。毎年「馬出し祭り」の浜降りは結構にぎやかで、楽しいそうですが、今年がやらないのは、ちょっと残念ですね。

NM 氏：うん、残念だなあ。日本の祭りは浜降りですべて祭りを終るのが多いです。祭りが終わって、参加者と神輿と一緒に祓いを受けるのは日本の祭りの浜降りの意味です。つまり、普段の穢れを洗って体と心をきれいになる。「馬出し」もそうです。神輿と馬が対決し、馬がその神話の「ヤマタノオロチ」の蛇です、その対決が終って、スサノオが「ヤマタノオロチ」を退治する、スサノオ、その神輿は、氏子と一緒に霞ヶ浦に入って、祓いを受ける。いままでずっとこういうふうにやりました。でも、あなた（筆者のことを指す）もさっき聞いたと思いますが、結局今参加してくれる人が少なくなって、奉納金も少なくなった。なので、新しく飾り直した神輿をみんなもったいないと思って、3 年以内に浜降りをやめた。

筆者：なるほどですね。じゃ、NM 氏は浜降りを 3 年以内にやめることに対してどう思いますか。

NM 氏：本当はやめるのがよくない。だけど、今、こんな状況でやめるしかないでしょう。

以上の事例から、伝承者たちは浜降りに対する考えを探ることができる。まず、祭りで浜降りをやめることに対して、氏子は賛成と拒否の双方の意見を持っている。HN 氏を代表とする浜降りをやめることに賛成する氏子の意見では、元々の「馬出し祭り」に浜降りがなかったのが 1 つの原因であり、また浜降りがかえって神に尊敬していない意味ではないかとの考えを持ってい

る。一方、より若い年齢層の氏子らは祭りの最後に浜降りをするのが、神と一緒に祭りを楽しむ時間であり、暑い天気ですぐの祭りを頑張った体を癒すことであり、それをやめたら残念な気持ちを持っている。結局、2012年からの3年間で、「馬出し祭り」の最後に神輿を担いで浜降りを行わなかった。だが、2014年の「馬出し祭り」は天気が異常に熱くて、祭りの最後にどうしても霞ヶ浦に入りたいという氏子がいて、結局神輿の代わりに神木を担いで霞ヶ浦に入った氏子4人がいった。これからの「馬出し祭り」は、浜降りが神輿でなく、神木を担いで浜降りをするようになる可能性があると考えている。

新しくしたばかりの神輿をできるだけ大事に扱うために、神輿の破損になる可能性を持っている浜降りを一時停止することに対して、氏子たちはそれぞれ異なる意見を持っている。このように、氏子たちは浜降りに対して違う意見を持ちながら、共に祭りを続けて行っている。結果としては2012年からの3年間で神輿を担ぐの浜降りがやめられたが、このような結果に対しても、氏子たちも違う捉えかたを持っている。だが、神輿を担いで浜降りをやりたい氏子は、神輿の代わりに神木を担いで浜降りをするというやり方を選らんだ。氏子の一人一人は祭りに対して、自分なりの考えを持って、自分なりの行動をするところが見える。それと同時に、ほかの氏子と共に、共同の地域の祭祀儀礼を行うことに頑張っている。

### (3) 祭祀組織の変化

「馬出し祭り」の祭祀組織は当屋に組み立てられることで、当屋を担当する家は祭りの準備活動及び祭りの運営に指導し、自宅を祭りの準備活動のために提供し、また祭りの当日に氏子たちが休憩するために自宅を開放する。そのために多くの家で、当屋を引き受けると、客間を普請し直すのが慣例になっている。これについての費用が当屋の経済的負担の大きな部分を占めている。また、宵祭りと祭りの当日に、祭りに参加する氏子たちは当屋のもてなしを受けながら休憩する。祭りの準備活動から運営まで当屋は重要な役割を果たしていると同時に、逆に当屋にとっては祭りが大変大きな負担である。

「馬出し祭り」の当屋制はいままで古宿と新田地区の組合に支えている。古宿には9つの組合があり、新田には6つの組合がある。それぞれの組合には6軒から9軒の家がある。「馬出し祭り」の運営はいままで当番の組合から当屋を選んで、祭りを支えている。しかし、筆者が調査したところ、「馬出し祭り」の当屋制は現在厳しい状況に直面している。現在、麻生の少子化の影響により、古宿と新田地区の氏子は人数が年々減っている。当屋を担当することは、祭り全体の準備をするほかに、祭りに参加する氏子の食事の準備も必要である。組合の氏子が順番に当屋を担当するので、原則的には70年程度1回に当屋を担当するとの頻度である。だが、実際には、現在組合に属するにもかかわらず、祭りの当屋を担当しない家が多数存在している。その原因を尋ねると、人力が足りないのは最も大きな原因だと教えてもらった。そのため、現在実際に祭りの当屋を順番に回されているのは古宿と新田地区の組合を合わせて、15軒の家しかない。

現在の当屋制の変化について、氏子に聞き取り調査を行った。

[事例 9] 2014 年 7 月 天王崎八坂神社 HN 氏 女性 45 歳程度

HN 氏は行方市麻生町新田地区の出身であり、現在行方市商工会で勤めている。家族は 2 人の妹がいて、現在一番年下の妹とおばあさんと一緒に住んでいる。家は新田地区の氏子として、毎年「馬出し祭り」を参加していた。昭和 60 年代に、HN 氏のおとうさんが 3 人の娘を祭りに参加できるため、にわか馬を作った。現在、子供たちが祭り使っているにわか馬は HN 氏のお父さんが作ったのである。2013 年に HN 氏のお父さんがなくなり、おばあさんが病気ですっと入院している状態である。HN 氏のお父さんは 2010 年から病気になり、その前に毎年の「馬出し祭り」を参加していた。お父さんが病気になってから、HN 氏の家は祭りの当屋をやらないことにした。前に当屋を担当した時のことを思い出し、HN 氏は「うちが当屋をしていた時に、いっぱい食べ物をみんなに用意したのよ」と嬉しそうに語ってくれた。だが、現在、家では妹 1 人しかいないので、祭りの時に見に来るのが HN 氏だけである。

[事例 10] 2014 年 7 月 NM 氏の自宅で NM 氏 男性 75 歳程度

筆者：当屋を担当するのが、大体何をしますか。

NM 氏：うん、事前の打ち合わせと祭りの時にみんな休憩の場所を用意するとか、祭りの各部分の調整とか。まあ、祭りの全般を見る。特にケガや事故とか起こさないように。後はみんな祭りを楽しめるように。

筆者：当屋を担当し祭りの準備をするのが大変でしょう。

NM 氏：まあ、いまですとそういうふうにしていたから。われの親父も当屋をやったし、親父の親父もそうだった。昔何十年にいったん当屋をした。今は、まあ、人が少ないから、当屋をできる家がすくなかった。うちはタクシー会社をやっているの、息子 2 人がいるので、まだ当屋できるよ。

筆者：じゃ、今何年ぐらいに一回当屋を担当していますか。

NM 氏：今は、15 軒があるから、まあ、15 年に一回だなあ。でも、うちがこの神社に一番近いから、当屋をやらないときでも、食べ物とか、冷たい飲み物とかみんなに準備するよ。

筆者：そうですか。NM 氏は本当に祭りに熱心ですね。

NM 氏：まあ、自分の地域の祭りだからなあ。神社に近いから、休憩の時に、みんなここに集まるから、冷たい物を用意したら、熱いなあ、馬出しが一番熱い時だからなあ。

筆者：そうですね。では、NM 氏は当屋の数の減少について、どう思いますか。

NM 氏：そうですね、今人が少なくなったから、当屋を担当する家も少なくなったなあ。それはとても残念なことでもあるし、まあ、しかたがないことでもあるなあ。日本は今少子化で、全国どこのお祭りもこのような問題があると思う。人が少ないから、お祭りもだんだん縮小されています。

NM 氏は行方市麻生町新田地区の出身であり、4 人の兄弟次男、兄と 2 人の妹がいる。1972 年に

同じ麻生出身の女性と結婚し、1973年に長女が生まれ、その後に2人の男の子を生まれた。今5人の家族であるが、長女が結婚して専業主婦になり、長男と次男がNM氏のタクシー会社で勤めている。

NM氏は筆者が調査した2014「馬出し祭り」の当屋を担当した。現在15年に1回当屋を担当し、祭りの準備から挙行までたくさんの手間がかかるそうであるが、12年前にお父さんが無くなってから、当屋の順番になった時に、NM氏は当屋の責任を持って、祭りの前に神輿と子供ためにわか馬の道具類をチェックし、また祭りが1人1人関係者の段取りを指導し、祭りが終わるまで祭りを見守っている。自分の性格が細かいところに気づくことが苦手だと自分の性格について言ってくれたNM氏が、「馬出し祭り」の当屋を担当するときに、祭りの全般を指導し、祭りの関係者の1人1人に担当する部分と注意事項を説明する姿は、とても真剣な当屋と見えた。お父さんから引き受けた当屋の責任をしっかりと守っている努力を見せた。

以上、当屋をやめた氏子HN氏とまだ当屋を頑張っている氏子NM氏の事例から、少子化は地域の祭祀儀礼の祭祀組織に大きな影響を与えていることが分かる。麻生町が人口の減少により、「馬出し祭り」の当屋を担当することができる組合の家は少なくなり、元々軒の氏子が何十年に一回当屋に回されたが、現在15年ごとに回されるようになっている。現在まだ当屋を担当する家に対して、当屋の負担はだんだん重くなっていると言えるだろう。

#### (4) 写真愛好家の到来

現在「馬出し祭り」のもう1つの変化は祭りを見に来る写真愛好家の到来である。行方市地域活性化事業が1980年代後半から開催され、それから地域活性化事業に関わる一連の開発活動が行われた。平成元（1989）年3月に「茨城の自然100選」に天王崎が選ばれた。同年、「ふるさと創生一億円の夢」のアイデア募集という活動が開発され、入賞する人に賞金10万円が送られる。また、同年にふるさと創生事業の一環として「麻生音頭」「麻生小唄」を麻生町商工会が作成される。平成2（1990）年7月に麻生町役場から東京駅の間を結ぶ高速バスが、関鉄、JRの運行により開業する。これまで麻生から東京までの交通は不便の状況が改善された。また、平成15（2003）年4月に白帆荘敷地に建設され、3階に展望風呂を備えた「あそう温泉白帆の湯」がオープンされた。さらに、平成16（2004）年6月にあそう温泉「白帆の湯」は「夕暮れの霞ヶ浦」の魅力が誘って、利用者10万人に到達された<sup>6)</sup>。

一方、平成2（1990）年11月19日に「馬出し祭り」が行方市無形民俗文化財に登録されることによって、多くの観光客を「馬出し祭り」に引きつけるようになっている。また、「馬出し祭り」は神輿と馬が激しく対決する場面が有名で、全国から多くの写真愛好家が訪れる。より多くの写真愛好家の注目を集めるために、1995年に行方市商工会と行方市観光協会により「水辺の里行方」写真コンテストを開催し、毎年霞ヶ浦周辺や水辺の風景をテーマにする被写体が水着モデル・観光帆曳き船「馬出し祭り」の写真を募集する。毎年「馬出し祭り」が開催する際にファッション雑誌にお願いしてモデルさん何人を神社まで呼んできて、モデルと祭りの様子を写真で撮って

もらうことがある。

このように地域活性化事業の推進により、「馬出し祭り」を見に来る観光客の人数が1990年から大幅に増えた。特に2003年に「馬出し祭り」の所在地八坂神社から歩いて10分ぐらいのところにあそ温泉「白帆の湯」のオープンにより、さらに観光客の人数の増加を推進した。地域活性化事業の推進は「馬出し祭り」に観光客をもたらし、いままで地域の民間祭祀儀礼として地域の人々だけが参加者になった「馬出し祭り」は、「外部」の人が参加するようになった。観光客の参加は「馬出し祭り」の名をより高めたと同時に、祭りに変化も持たされた。元々祭りの当日だけに神輿を馬の対決をしていたが、馬の数が6匹から今の2匹になって神輿との対決の時間も大幅に減っていて、「馬出し祭り」が最も名高い場面をより多くの観光客に見せるために、1990年代から祭り当日の前の日の宵祭りで馬と神輿の対決が行われるようになっていた。

以上、現在の「馬出し祭り」が馬の数の変化、浜降りの変化、当屋制の変化と観光客の変化から見て、「馬出し祭り」は目に見える、耳に聞こえる「有形」の変化があったことが分かる。元々祭りで重要な要素を占めていた馬が、地場産業の変更により、自宅で馬を飼った人はいなくなる次第に、馬場や牧場へ祭りの馬を借りるようになった。現在、馬の数が元々の10匹から3匹になった。祭りで使える馬の数の減少は、祭りで神輿と馬を対決する時間が大幅に減少されてきた。また、昭和60年からやり始めた浜降りには、近年祭りが経済的な原因でやめられている。さらに、地域の少子化の影響により、当屋を担当することができる組合の氏子は少なくなっている。そのほか、地域活性化事業の発展により、「馬出し祭り」は氏子だけ参加する祭りから、観光客に「見られる」祭りになるようになった。「馬出し祭り」のこれらの変化は単に地域の少子化、活性化事業の発展により起こした消化でなく、現代社会が全体の発展とともに祭りの変化を生じたのではないかと考える。では、これらの変化に対して「馬出し祭り」と緊密な関わりを持っている伝承者たち及び、祭りを見に来る写真愛好家はどのように捉えているのか。次の節を通して見てみよう。

## 5 変化に対する捉え方と祭りの持続

現代化と地域活性化事業の発展により、「馬出し祭り」は多くの「有形」の変化があった。これらの「有形」の変化の背後に伝承者の祭祀儀礼に対して心理的な面にも変化が起こった。まず、伝承者が「馬出し祭り」の「有形」の変化に対する姿勢の分析から伝承者の祭祀儀礼に対する心理的な変化を捉えよう。

### (1) 当屋の視点から見る「馬出し祭り」の変化

現在「馬出し祭り」の当屋は15軒がある。ここでは当屋のNM氏とHN氏への聞き取り調査を通して、当屋の視点から現在「馬出し祭り」の変化及び、これから祭りの持続に対する捉えか

たを見てみよう。

〔事例 11〕 2014 年 7 月 NM 氏の自宅で NM 氏 男性 75 歳程度

筆者：現在でも「馬出し祭り」を行うことによって麻生の疫病を退散することができると思いますか。

NM 氏：うん、そうです。まあ、もともと「馬出し」は疫病退散の祭りだ。麻生の氏子の 1 年間の疫病を払ってくれる。それはもう 300 年のものだから、われわれの祖先から伝わるものだ。私が知っている限りは、戦争の時にいったんやめたことがあるが、それ以外に毎年やる。でも、今祭りを行って疫病退散できるなんか信じる人があんまりいないでしょう。われわれの時代は本当にそれを信じて祭りを行ったの。今時代が変わったなあ。

筆者：そうですね。（中略）別の問題に移したいと思いますが、祭りで子供ための神輿と馬が用意したのを見ましたが、これは今の子供たちが祭りに興味を持たせるという考えですか。

NM 氏：うん、それもあるんですが、やはり子供たちもこの地区の氏子です。なので、麻生の祭りを参加する義務があって、こういう参加する意識も重要だ。子供たちが毎年 7 月に近づいたらわくわく期待しているかなあ。

筆者：私はインターネットで行方市商工会のホームページで「馬出し祭り」の宣伝を見ました。その以外に「馬出し祭り」を宣伝することもありますか。

NM 氏：それは、商工会がやったことだ。われわれはそんなことをやらない。

筆者：「馬出し祭り」を宣伝ほしくないですか。

NM 氏：そもそもこれはわれわれここに住んでいる氏子がここの神様に拝むことだ。そんな宣伝するものじゃないから。

筆者：じゃ、「馬出し祭り」を見に来る観光客にも祭りを見て来てほしくないですか。

NM 氏：それはあんまり関係ないと思う。観光客が来ても当然構わないけど、でも、あまりにも宣伝しちゃうと祭りが変なことになっちゃうのがあんまり好きじゃない。

以上、当屋の NM 氏の話から「馬出し祭り」の変化に対する態度が見える。現在祭りが直面する少子化・過疎化の影響で後世代に伝承する問題は徐々に表面化されていて、伝承者たちがこの問題を解決するためにたくさんの努力をしている。例えば、現在麻生小学校の 3 年生は宵祭りと祭りの日に子供神輿を担ぎ、子供ためのわか馬を引き氏子地域で巡行することにする。これは子供を自分が住んでいる地域の祭りに興味を持たせる考えがあるが、小さいときから地元の集団意識を認識させるという心遣いもあるだろう。子供たちさえいれば、「馬出し祭り」の伝承が継続されるという考え方を持っている当屋の気持ちが分かった。また、地域の祭祀儀礼を地域活性化事業の発展に巻き込まれたくないが、祭祀儀礼を後世代に伝承するために、「外部」の力を借りて祭祀儀礼を伝承やざるを得ない気持ちが伝承者は持っている。

筆者は 2012 年「馬出し祭り」当屋との聞き取り調査が最初にはそんなにうまくいけなかった。

筆者は最初に当屋を訪れたのが宵祭りの先日であった。天王崎八坂神社の宮司さんにより当屋を紹介してくれた。しかし、当屋は最初に筆者が祭りに対して聞き取り調査をしたいとのお願いに答えなかった。その理由を聞くと、当屋は麻生タクシーの会長を務めているので、普段の仕事に暇を取れないということである。確かに聞き取り調査が対象者の仕事に邪魔になってはいけないと筆者も考えて、当屋の気持ちを理解した。しかし、当屋の次の理由が筆者の心を少し驚かせた。「こんな田舎のところで、このちっぽけの祭りを調査するのは何かできるのか」と当屋は眉をしかめて筆者にこのように聞いた。当時に聞かれた筆者は当屋の話に少しびっくりして、複雑な気持ちになった。祭りに一番中心な伝承者は地域の祭祀活動にこのような気持ちを持っているとは思わなかった。

しかし、後日に筆者との接触がだんだん多くなったことによって、結局当屋は筆者の聞き取り調査に非常に協力してくれた。これは筆者みたいの外国人の身分の人に対して、自分の地域の祭祀活動を見せることに抵抗しているだろう。逆に、地域の祭祀儀礼はそもそも地域の氏子だけが参加者であるという側面から考えると、伝承者の地域の祭祀儀礼に対する素朴な信仰心が少し見えるだろう。

平成2(1990)年11月19日に、「馬出し祭り」は行方市麻生町指定無形民俗文化財に登録された。だが、氏子に対する聞き取り調査を通して、氏子たちは「馬出し祭り」が無形民俗文化財に登録されたことをはっきり意識していないことに気づいた。最初にある氏子に「馬出し祭り」が1990年に無形民俗文化財にとうろくされたとのことについて話を聞きたい時に、その氏子は「ええ、そうですか。無形民俗文化財になっているんですか。知らない。」と答えてくれた。あまりにも驚かせた答えなので、ほかに当屋を含め何人かの氏子にも同じの質問を出し、結局ほとんどの氏子は「馬出し祭り」が現在麻生町指定無形民俗文化財ということに意識していない状況である。そのうち、1人の氏子だけは祭りが現在無形民俗文化財に登録されていることが知っている。だが、無形民俗文化財に登録されても、補助金をもらっていないため、ほとんどの氏子は無形民俗文化財のことをまったく意識していない。つまり、「馬出し祭り」の伝承者たちはいままで、無形民俗文化財と意識していない状態で祭りを毎年行って伝承している。われわれ「外部」の人に対しては無形民俗文化財に登録されるということが、誇りのことであるかもしれないが、現地の伝承者にとっては、「馬出し祭り」が彼らの地域の祭祀儀礼であり、また日常生活の1部分である。伝承者の祭りを伝承する気持ちは祭りが無形民俗文化財に登録された前とまったく同じ、また祭り自体も変化を生じていないと言えるだろう。

## (2) 一般氏子の視点から見る「馬出し」祭りの変化

「馬出し祭り」は氏子の1人1人に行う祭祀儀礼で、祭りに参加する氏子から「馬出し祭り」の変化をどう見るのか、以下の事例から見てみよう。

[事例12] 2012年7月 KT氏 男性 45歳 飲食店経営 麻生出身

筆者：KT氏は麻生の出身ですか。

KT氏：僕は麻生生まれ麻生育ちの人間で、今親父から受け継いだラーメン店を経営している。

俺が小学生のときから毎年「馬出し」に参加していた。

筆者：KT氏は今「馬出し祭り」で何を担当していますか。

KT氏：俺は神輿を担ぐの。大体氏子のみんな神輿を担ぐよ。今人が少ないので、青年団の人が馬を引いて巡行して、ほかの人は神輿を担ぐの。馬と対決するとき、神輿を何回も担ぐから、結構疲れる。だから、みんな交代で神輿を担ぐ。

筆者：今の「馬出し祭り」を見に来る観光客はたくさんいますね。

KT氏：そうですね。まあ、この祭りが今行方市の無形民俗文化財に登録されるから、見に来る人が多くなった。あと、行方市がこの祭りの写真コンテストをやった、カメラマンたくさん来た。この前、あそう温泉もあった。観光客はこれが好きでしょう。

筆者：ということは、市の無形民俗文化財に登録される前にほとんど麻生の氏子だけ祭りに参加するよね。

KT氏：そうです。今市の商工会からもいろいろ宣伝してもらった。雑誌のモデルさんも来るよ。後、写真コンテストとか。これで、観光客も来るようになったかなあ。

筆者：そうですね。

KT氏：はい。今行方市から祭りをいろいろ宣伝するみたいで、じゃないと、誰がこんな小さいところに来るだ。「馬出し」なんかも見に来る人がいないでしょう。

筆者：じゃ、「馬出し祭り」を見に来る観光客が多くなったのは祭りにもいいことだと思いますか。

KT氏：それはいいことでしょう。われわれは毎年こんな儀礼をやっていることも多くの人を知ってほしい。

筆者：じゃ、KT氏は今「馬出し祭り」が疫病退散ができる祭りと信じますか。

KT氏：今なら誰もそう思わないでしょう。昔疫病にかかったら治れないからこういう祭りをやって、神様に願って、疫病を治してもらうのを願った。今、病気にかかったら病院に行くでしょう。

【事例13】2014年7月 天王崎八坂神社で 古宿氏子 HN氏 女性 45歳程度

HN氏：今お祭りが縮小されていますね。前は、お祭というと、うちなんかも、親戚をいっぱい呼んで、座敷いっぱい包まったの、みんな全部親戚を呼んでたと思うよ。これはもうなくなった。前は、馬出しだから、来てくださって、ご馳走を食べて、それがなくなったね。

筆者：それは大体いつからなくなったんですか。

HN氏：そうですね。うちの場合は世代が変わったときに、なくなったかなあ。十年ぐらい前かなあ。今でも呼んでる人がいるよ、家に。親戚呼んで、あのう、ご馳走を食べさせて、やっている家ありますから。

筆者：それが終わったら、一緒に祭りを見に行きますか。



HN 氏：うん。そう。

筆者：じゃ、祭りの前の日に親戚を呼びますか。

HN 氏：うん。そういう場合もあるし。2 日間連続で祭りみたいな、もう、本当に冷蔵庫に入りきれないほどやってたんですけどね。

筆者：盛大でしたよね。

HN 氏：盛大でした。やっぱり。今は、大体の家がやめちゃったかなあ。

筆者：じゃ、なんで今みんな祭りの時に親戚を呼ばなくなったんですか。

HN 氏：そういう、こう、なんと言うのかなあ、そういう繋がりは、あんまり、日本は、もうなくなったとかね。なくなっていますよね。まだ韓国とか、お国の中国には、親戚とか、深い繋がりがあってですけど、日本は、その、やっぱり、核家族が進んで、どんどん、こう、親戚とか、家族とのあれが繋がりは、縁とか、そういうものが、どんどん、日本は、もう、ひたすら薄くなってきてるのかもしれないなあと思うね。だから、とてもこれからの日本は寂しいかなあと思うの。今 1 億 8 千万の人口が、30 年後には、8 千万しかなくなっちゃんでしょうね。

筆者：でも、馬出し祭りを見て、子供を参加してほしいという意識がとても強いと見えますね。

HN 氏：そうですね。前はたぶん、その子供の神輿は中学生しかしてなかったんですけど、それをこう、小学の 6 年とか、5 年とか、3 年とか、こう、だんだん、だんだん、小さい子供も神輿を担ぐようになったんだよね。そういうように、制度を変えていかないと、この祭りそのものがこう、存続していかないじゃないかなあ。

KT 氏の話から「馬出し祭り」の変化に対する積極的な態度が見える。観光客が増えるによって、氏子が観光客と祭りで交流することには「見られる」ほうが「見る」ほうと直接対話する機会を与えた。また祭りの「内部の人」と「外部の人」との交流にもなっている。

このように、氏子たちは観光客が見ている目線から自分たちが努力している儀礼が「外部の人」から見ても価値がある面白い儀礼なので、一層地域の儀礼を続けて伝承しないといけないと思っている。だが、氏子は祭祀儀礼に対する信仰が希薄化される傾向が見える。氏子は「馬出し祭り」を地域の疫病を退散させる儀礼より地域の民俗儀礼だと考えて伝承する部分が多くなっている。また、氏子は儀礼に対する信仰の希薄化になるもう 1 つの側面が、現代化と地域活性化事業の発展により儀礼にもたらされる変化を認めるようになることである。

また、氏子 HN 氏の話から、現在の氏子が昔の祭りに対する懐かしさとこれから祭りの伝承に心配する気持ちが読み取れる。昔のように、祭りの時に親戚をお宅まで呼んで祭りを祝うことは現在なくなった。また、祭りに参加する氏子の人数も年ごとに減っている傾向が見える。「馬出し祭り」の現在の変化に対して、氏子はこれから祭りを後世代へ伝えていく際に、「外部の人」の参加を求めたいとの考えが出てきた。

### (3) 写真愛好家の視点から見る「馬出し」祭りの変化

「馬出し祭り」は神輿と馬が対決する場面が有名で、毎年たくさんのカメラマンを引き付ける。また、行方市商工会は1995年から「馬出し祭り」の写真展とコンテストが毎年行われている。

筆者は「馬出し祭り」の当日に出会った1人のカメラマンに聞き取り調査を事例にして述べる。

[事例14]2012年7月 写真愛好家 ST氏 1932年生まれ

筆者：何年から「馬出し祭り」に参加しに来るんですか。

ST氏：おととしが会社から定年になるから、私が住んでいる地区の撮影会に参加した。その人から「馬出し祭り」のことを紹介してもらって、馬と神輿が対決することが珍しいと言われるので来ました。

筆者：撮った祭りの写真をコンテストに参加しますか。

ST氏：どうかなあ。とりあえず今日いっぱい撮って、帰ったら写真を見てから考える。

筆者：この祭りが馬と神輿の対決が有名だと知られているが、元々宵祭りでこれをやらないが、今観光客のために宵祭りにもやるようになったと聞いていたが、これについてどう思いますか。

ST氏：まあ、私馬と神輿を対決する場面を写真を撮りに来たので、わざわざそれを演じてもらうのありがたいですけども。

筆者：もっとたくさんいい写真が撮れますね。

ST氏：そうです。人が多いから、なかなかいい写真撮れないです。もう1日やるなら、けっこういい写真取れます。

[事例15]2012年7月 天王崎八坂神社で 写真愛好家 Aさん 男性 1947年生まれ

筆者：何年前から「馬出し祭り」の写真を撮り始めていたんですか。

Aさん：8年ぐらいかなあ。そう、8年前だ。

筆者：最初にどのルートで「馬出し祭り」を知っていたんですか。

Aさん：同じ撮影会の友達から紹介してもらったの。われわれの撮影会で全国珍しい祭りを紹介するのよ。

筆者：「馬出し祭り」はそのうちの1つですね。

Aさん：そう、そうです。

筆者：「馬出し祭り」の写真コンテストをさきに知ってから「馬出し祭り」のことを知っているんですか。

Aさん：あ、そうかも。撮影会からこのコンテストを知って、それで8年前に初めてこの祭りを見に来たんです。

筆者：祭りで何を撮りたいですか。

Aさん：それは祭りの様子とか、後祭りをする人たちの様子とか。

筆者：この祭りが馬と神輿の対決が有名だと知られているが、元々宵祭りでこれをやらないが、

今観光客のために宵祭りにもやるようになったと聞いていたが、これについてどう思いますか。

A さん：それは知らないね。それはちょっと、本末転倒じゃないの。この祭りがあって、それで人が祭りを見に来た。人を見に来るために演じるのは、見る価値も失うでしょう。

「馬出し祭り」撮影コンテストの開催は全国から多くの写真愛好家を引き付けていると同時に、祭りの宣伝にもなっている。写真愛好家の写真を見て「馬出し祭り」のことを知るようになる観光客も増えることになる。写真愛好家の立場から見ると、「馬出し祭り」が最も「資源」になれる馬と神輿の対決の場面を繰り返し演じることは、祭祀儀礼の資源化を最大化にするほかならない。祭りさえ続けて行われれば祭りを撮影することが意義があることで、祭りの変化と観光化とも祭りの一部分として写真で記録する価値が持っていると考えられる。

これら「有形」の変化と伝承者が「無形」の変化が合わせて、「馬出し祭り」は行方市地域活性化資源事業の一環として行方市の観光事業に貢献した。だが、祭祀儀礼自身が地域活性化資源事業の発展により変化がもたらされた。地域活性化の取り込みにおいて見出される地域資源と都市との関係のもとで資源として認識されるものにほかならない。つまり、地域の外部に向かってアピールするもの、観光客という外部者の視線を通じて地域の独自性が認められるものこそが地域資源となり、地域活性化の取り込みを活用できるのである（渋谷 2006）。1992年に制定された「地域伝統芸能などを活用した儀礼の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律（通称「お祭法」）では、民俗芸能は観客が集まる程度に応じて地域経済の活性化に貢献する地域資源とみなされている。このように地域活性化事業に応じて祭祀儀礼の改変が求められることも多い。したがって、祭祀儀礼の「祭祀」の要素が薄くなってきて、宗教的な機能を持っている「儀礼」から伝統文化を帯びている民俗儀礼の「祭礼」へ転換される傾向が見える。

#### おわりに

本文では「馬出し祭り」はスサノオ神話との関わりに対する分析から見て、近代に天王崎八坂神社の祭神が牛頭天王からスサノオに変更され始めてから、「馬出し祭り」の由来はスサノオがヤマタノオロチ神話と言われるようになったのではないと推測した。近代日本が国民国家を志向しながら、天皇家を中心とする強力なイデオロギーのもとで、皇室の由来を明らかにするため、日本神話は直接に政治的な意義が覆われるようになった。このような社会環境で、スサノオがヤマタノオロチ神話は地域の疫病退散儀礼と結び付けられ、疫病退散儀礼の由来になった。

一方、現代化の発展により「馬出し祭り」は少子化・過疎化の影響でその伝承が深刻な状況になっている。祭祀儀礼をよりよく伝承させるために、地域活性化事業の発展を通して祭祀儀礼の存続を求める道を歩くようになった。従来地域活性化事業の発展が地域の祭祀儀礼に多少影響を与えているとの観念は存在している。だが、本文の研究対象茨城県行方市麻生町天王崎八坂神社の「馬出し祭り」が現在社会における変化と持続する状況への分析を通して、地域の祭祀儀礼が

変化する原因は単一な要素ではないとのが分かった。

「馬出し祭り」は現在儀礼の要素、祭祀組織及び構造が変化が生じた。また、地域の伝承者は祭祀儀礼に対する信仰心もすこしずつ変わってきた。だが、これらの変化は原因が単に地域活性化事業の発展ではなく、現代社会の発展により地域の少子化・過疎化の進展も祭りが変化してきた1つの原因である。民間祭祀儀礼はそもそも伝承者が主体者であるので、祭祀儀礼を地域活性化資源として発展させる際により伝承者の立場を尊重し、伝承者の主体性を強調すべきであると考えている。このように、伝承者の主体性を強調すれば、民間祭事儀礼の持続と地域活性化事業は必ず矛盾するわけではない。本文は現在の「馬出し祭り」の変化及び祭りに関わっている人々の変化に対する捉えかたへの分析を通して、地域の祭祀儀礼の持続を考える際に、伝承者の主体性を強調する重要性が分かった。

現在社会の発展により、地域の少子化・過疎化は必ず祭祀儀礼に影響を与える。また、伝承者たちの祭祀儀礼に対する信仰心も少し変化していく。だが、地域の伝承者たちさえいれば、祭祀儀礼は継続して行われることができる。伝承者にとって祭祀儀礼は日常生活の1部分なので、無形民俗文化財に登録されなくても、氏子たちは祭事儀礼を後世代へ伝え続けていく努力は続くのである。

#### 注

- (1) 麻生八坂神社の宮司により、神社の神殿には祭神の「正体」の物が常に置かれて、祭りの日にそれを社殿から取り出し、神輿の神殿に入れる。神事の祓いが終わったら、また元に戻すという。祭神の「正体」は宮司以外に誰でも見せてはいけないという。
- (2) 氏子町内で巡行する際、馬が5色の吹流しで飾り、遠いところから見れば赤色が特に鮮やかである。馬が巡行する際の様子と区別するため、真っ白の布で馬を包むことにする。
- (3) 当地の方に「ヒ」と呼ばれるものは御幣で作られ、大きさ1センチメートル広い2センチメートル長い紙である。当地の方により、「ヒ」は魔よけの効果があり、特に祭りで身につけると1年の疫病退散ができるため、祭りに参加者のみんなは神事で宮司からもらった「ヒ」を耳に挟み祭りをする。
- (4) 2013年8月に氏子SK氏に聞き取り調査によるもの。
- (5) 天王崎八坂神社の社殿で掛かられている神図について、麻生の郷土史家HN氏と確認の上で、牛頭天王であることが分かった。HN氏は「馬出し祭り」に2本の論文を発表した。詳細は本文の参考文献に参照する。
- (6) このデータは行方市商工会の提供によるものである。

## 参考文献

- 足立重和 『郡上八幡 伝統を生きる—地域社会の語りとリアリティ』 新曜社 2010
- 茨城市編集委員会 『茨城県史・市町村編』 茨城県庁 1972
- 奥野義雄 『祈願・祭祀習俗の文化史』 岩田書院 2000
- 桜井龍彦 「馬と厄災送りの民俗」『日本民俗学』223号 2000
- 重岡 徹 「戦後における農村環境整備の推移—農村生活の変化と関連させて—」『村落社会研究』1(2) 1995
- 渋谷美紀 『民俗芸能の伝承活動と地域生活』 農山漁村文化協会 2006
- 高橋 克 「馬だし祭り(富津市)—神の乗る馬の祭り—」  
『東京湾岸祭礼報告』1号 2008
- 高橋在久 「馬だし祭り」『日本民俗学』15号 1960
- 羽生 均 『麻生の文化』3号 行方市麻生郷土文化研究会 1994
- 羽生 均 『麻生の文化』23号 行方市麻生郷土文化研究会 2004
- 星野 紘 『過疎地の伝統芸能の再生を願って』 国書刊行会 2012